

35年の高校教師生活を振り返って

竹内 悟（コミュニティ福祉学研究科博士課程前期課程）

1. 高校生の状況の変遷

1983年4月、埼玉県内の県立高校に英語科教諭として着任した。県内の生徒急増を背景として、10年間で70校の高校が開校した時期で、この年、養護学校（現在は特別支援学校）を含めて7校が開校、私の赴任校も10学級、450人の生徒を迎えての開校だった。新設校ということで、普通教室棟だけが完成していただけで、特別教室棟、体育館は建設中、グラウンドも未整地の状態で、工事現場の中での授業開きだった。この時代、中学校での校内暴力をはじめとする「教育荒廃」がそのまま高校にももたらされた中で、開校直後から授業成立は困難を極めた。学習習慣の未確立さから、1時限50分間座っていることすら出来ず、歩き回る生徒たち。学習能力の低さは、単に学習が理解出来ないだけにとどまらず、短絡的思考にもつながり、そのことが社会通念の理解を妨げ、さまざまな反社会的行為まで発展していくケースも頻繁だった。また、大人、学校への不信感もすさまじく、教師の指導に対して反抗する場面も日常的であった。しかし日々の教育活動の中で、彼らの生活の実態を見てみると、そこには想像以上の荒廃した生活が存在していた。経済的困窮、それに伴う借金と貸金業者の激しい取立ての重圧、保護者の離婚などによる家庭崩壊、それは10代の彼らが背負うにはあまりに重く、厳しい現実があった。

その後バブル崩壊、リーマンショックを経て、日本社会の変遷に合わせて、生徒を取り巻く状況は、1980年代よりも明らかに悪化した。「貧困層」が拡大した。生徒たちの状況も大きく変化し、かつての粗暴さは影をひそめ、生徒たちの社会問題行動は表面的には減少した。しかし内面的には傷つけられ、ねじ曲げられている生徒たちは決して少なくなかった。人間関係を作ったり、集団に入ることが、極度に苦手な生徒、もしくは拒否さえする生徒の実情が浮かび上がってくる。特に携帯電話、スマートフォンの出現は生徒たちを取り巻く状況を激変させた。かつての生徒同士の暴力行為は通信機器を媒介としての言葉による暴力に変わった。こうしたことを反映してか、精神面での変調をきたす生徒も多く、保健室には来るものの、教室には入れないいわゆる「保健室登校」、摂食障害、ひきこもり、または自ら命を自らの手で断つケースもあり、スクールカウンセラーを活用した教育相談体制の確立や、専門医療機関との連携も重要になってきていた。

2. 英語教師として

新任教師としてのスタートは極めて厳しい状況だった。ほとんど学習内容が理解出来ていない生徒たちにとって、通常の文法、訳読などは不可能であり、それ以上に授業そのものの成立が困難であった。生活指導、さらには体育祭、修学旅行、文化祭などの学校行事への取り組みなど教師集団での指導で時間をかけながら、生徒たちとの信頼関係を少しずつ回復しながら学校生活に一定の落ち着きを確保してはきたが、様々な理由で中途退学者はあとをたたなかった。そんな中で生徒たちが1日の学校生活の中で最も時間を費やすのは授業である。私たち教師にとっては授業が生命線である。しかし実際の生活の中でほとんど使わない英語にどう彼らの興味を持たせていくのか。同じような悩み、苦しみを抱える英語教師たちとともに話し合う中で、授業の目的を「『英語』を通じて生徒の心を育てる」ことに設定し実践を繰り返してきた。豊かな内容をもつ教材、多感な10代の高校生たちに感銘を与え、心を揺さぶる教材を精選し、彼らに無理のないようにアレンジするのは教師の力量でもある。同時に彼らは高校生としてのプライドも持っていて、あまりにも安易な教材は彼らの自尊心を傷つけることも配慮しながら、マーチン・ルーサー・キングJr. の1963年8月28日、ワシントン大行進の「私には夢がある」"I have a dream"スピーチなど、かなり難解な部分も含んではいるが、公民権運動当時のアメリカの状況を映像などをまじえて丁寧に解説していく中で、当時の人種差別を自らの現実と重ね合わせて捉える生徒もいた。映画「独裁者」ではチャップリン演じる独裁者ヒンケル（ヒトラーの風刺）の「兵士たちよ、民主主義の名の下に団結しよう！」と訴えるシーンは強烈なインパクトを生徒に与えた。最近ではノーベル平和賞に輝いたマララ・ユフスザイの国連での演説「一人の子ども、一人の先生、一本のペン、一冊の本が世界を変える。教育こそが唯一の解決、教育が第一」などは高校生たちとはほぼ同じ年齢であるだけに、共感するところは大きかった。

もう一つ重視したのは、「自己表現」である。指導要領では「英語ⅡC」「ライティング」そして「英語表現」と名称は変わってきたが、主となる学習は英語で文章を書くことである。日常の自己紹介、家族、友人など身近なものから、社会問題（環境、差別、人権）などにも発展させていく。その中で困難な家庭環境にあって、「本当は私は母を尊敬している」「I respect my mother」と書く作文を読んで、母語ではとても口に出して言えないことも、むしろ外国語というフィルターを通すことで本音を表現できる、このことに外国語教育の重要な意義を見出したような気をした。

自己表現の指導にはもちろんネイティブ・スピーカー（ALT）の補助は必要ではあるが、彼らに丸投げしてはいけぬ。作文指導は教師になるまでの自分自身の英語学習の過程と重ね合いながら、生徒の英語のみならず人間としての成長に私たちが寄り添う姿勢が大切になる。作文は添削（correction）ではなく共同（conference）

である。さらに自己表現は生徒対教師のみでなく、スピーチというかたちで発表し合い、お互いの考えを共有しあうことも大切であり、学習集団を4人はどの単位で作り、共同で学び合いを行う形式、例えば「共同学習」、「強調学習」などで学習を効果的にする取り組みも教師集団として取り組んできた。

3. まとめ

高校3年間の教育の恩恵を受けることなく、途中で学校を去っていく生徒たちを多く見てきた。その後彼らがどのような人生を送っているのかはほとんどわからない。現代の日本社会において、重すぎる重荷を背負わされ、教育を受けることを放棄、もしくは放棄せざるを得なかった生徒たちに、教職員として自分たちの限界と無力感を味わされたことも数多くあった。ここでは英語教育に焦点をあてて述べてきたが、このほか教育活動として部活動、生徒会、委員会活動など、多様な分野で取り組んできた。高校生年代というのは、非常に感受性豊かな時期であるとともに、大きく成長する、別の言葉で言えば「変わる」時期でもある。私たちの業界用語では「化ける」という言葉をしばしば使うことがある。ふとしたきっかけで、性格から人間性まで想像も出来ないほど大きく成長するケースも数多く見てきた。こんな成長の一端を教師集団と共有しあいながら、生徒たちはみなすばらしい潜在能力を内に秘めていて、私たちは彼らに自分自身でも気づいていない能力に気づかせ、彼らを信じ、寄り添い、見守ることで、彼らは彼ら自身の力で成長していく、そんなことに気づかされた教員生活ではなかったかとふりかえる現在である。